

郷土を知る
むかしむかし

昔々の

そお市

第34回



大山どんの石がんだ

生涯学習課 文化財係 ☎ 0986-76-8873

末

吉公園墓地内に大山どんの石がんだという箱型の墓石が残されています。今回はこの墓石に伝わる物語をご紹介します。

「元禄4年（1691）のこと、末吉・大山家の人で権大僧都大越家聖為^{※1}という法師がいた。

ある時、京都まで修行に出かけた帰路、乗っていた船が遭難し、おう州日の本外ヶ浜という地へ流れ着いた。そこで、ある豪壮な屋敷にしばらく世話になることとなり、大変なもてなしを受けた。連日山海の珍味を馳走になり、楽しく遊び暮らすうちに法師の身体はよく肥えていった。

ある日、法師が屋敷の蔵を覗いたところ、薄暗い蔵の中で、生きた人間が逆さ吊りにされ、頭に突刺された筒から脂が滴り落ちてくる光景を目にした。ここは人間を養い肥えさせ、脂を絞り取る恐ろしい屋敷だったのである。驚いた法師は屋敷から逃げ出そうとしたが、門が固く閉ざされ外に出ることができない。

法師は「門をお開きください。故郷に帰ることができれば、断食して命を絶ちます。」と一心に念仏を唱えた。

すると、不思議なことに門が開き、屋敷を脱け出すことができた。

さて、故郷に辿り着いた法師であったが、祈願したことを実行しなければならぬ。そうしなければ、更なる災難が降りかかるためである。法師は人が入れるほどの墓石を作らせ、葬儀をあげたのち墓石に入った。墓石の中では鈴を鳴らし読経して過ごした。食事は握飯を差入れてもらい、徐々に握飯を小さくするよう命じていた。墓石の側を通ると、法師が鳴らす鈴の音が聞こえていたが、次第に音が小さくなり、ついに全く音が聞こえなくなった。」

墓石には丸窓が開いており、覗くと人骨が見えていたという話や、大正期頃まで大山家に法師の錫杖^{※2}や衣が残っていたといえます。物語について真偽の程は不明ですが、仏法を厚く信奉し殉じた法師がかつて末吉の地に存在していたことは確かなようです。

- ※1 権大僧都…仏教における僧侶の位。
- ※2 大越家…修験道における山伏の位。
- ※3 錫杖……僧侶・修験者が持ち歩く杖。



【アクセス】末吉公園墓地
末吉町南之郷226番地2



大山どんの石がんだ